

『文選集注』江淹「雜体詩」 訳注
 王侍中(懷德)祭

荒井 禮

01 伊昔値世乱 伊れ昔 世の乱るるに値い
 02 秣馬辞帝京 馬に秣いて帝京を辞す
 03 既傷蔓草別 既に傷む 蔓草の別れ
 04 方知杖杜情 方めて知る 杖杜の情
 05 崑函復丘墟 崑函 復た丘墟
 06 冀闕緬從横 冀闕 緬として從横たり
 07 倚棹泛涇渭 棹に倚りて 涇渭に泛かべば
 08 日暮山河清 日は暮れて 山河清し
 09 蟋蟀依桑野 蟋蟀 桑野に依り
 10 巖風吹苦莖 巖風 苦莖を吹く
 11 鶴鷁在幽草 鶴鷁 幽草に在れば
 12 客子淚已零 客子 淚 已に零つ
 13 去郷廿載 郷を去ること廿載
 14 幸遭天下平 幸いにして天下の平らかなるに遭う
 15 賢主降嘉賞 賢主は嘉賞を降し
 16 金貂服玄纓 金貂は玄纓に服す
 17 侍宴出河曲 宴に侍りて河曲に出で
 18 飛盖遊鄴城 蓋を飛ばして鄴城に遊ぶ
 19 朝露竟幾何 朝露 竟に幾何ぞ

20 忽如水上萍 忽として水上の萍の如し
 21 君子篤惠義 君子 惠義に篤ければ
 22 柯葉終不傾 柯葉 終に傾かず
 23 福履既所綏 福履 既に綏なぐさんずる所なれば
 24 千載垂令名 千載 令名を垂れん

〔押韻〕

○京・横・平(下平声一二庚)、莖(下平声一三耕)、情・清・纓・城・傾・名(下平声一四清)、零・萍(下平声一五青)

〔校勘〕

04 方知杖杜情 「方知杖杜情」(尤刻本・胡刻本・国子監本)。
 「方知杖(音第)杜情」(陳八郎本)。

06 冀闕緬從横 「冀闕緬縱横」(尤刻本・胡刻本・国子監本)。
 州本)。
 本・陳八郎本・明州本・秀州本)。
 「冀闕緬縱横」(建州本)。

07 倚棹泛涇渭 「倚棹汎涇渭」(尤刻本・胡刻本・国子監本)。
 本・明州本・秀州本・建州本)。

10 巖風吹苦莖 「巖風吹若莖」(尤刻本・胡刻本・国子監本)。
 「巖風吹枯莖」(陳八郎本)。

州本)。
「蔽風吹枯(善本作若莖)」(明州本・秀州本)。

「蔽風吹枯(善作若莖)」(建州本)。

11 鶴 鶴在幽草

「鶴(音貫)鶴(我亦)在幽草」(陳八郎本)。

「鶴(音貫)鶴(俄亦)在幽草」(明州本・秀州本・建州本)。

13 去郷廿載

「去郷三十載」(尤刻本・胡刻本・国子監本)。

「去郷二十載」(陳八郎本)。

「去郷二(善本作三字)十載」(明州本・秀州本)。

本)。

「去郷二(善作三)十載」(建州本)。

20 忽如水上萍 「忽如水上萍」(尤刻本・胡刻本・国子監本)。

「訳」

かつて乱れた世の中に直面し、馬を牽いて、都は長安に別れを告げた。この時、古い「野有蔓草」の歌に詠じられたような、世の乱れによる不本意な別れにこころを痛めることとなり、そこではじめて、「杖柱」に歌われたような、親しき者と離ればなれで路傍に独り立たされる孤独の悲しみを知った。

崑山の函谷関は荒れて丘陵となり果て、かつて華美を誇った宮殿の門もぼろぼろなありさまで、塵に埋もれて跡形もない。棹にまかせて涇水に漕ぎ出し、渭水に舟を浮かべて遊んでいると、陽は沈みゆき、夕焼けに燃える山々と赤黒く色づ

く河の清らかな様子が、わが眼に映り込んだ。

こおろぎが桑野原に潜んで鳴き、冷たくきびしい秋風が、枯れて折れそうな桑の木を吹いていく。水鳥が奥深くに茂る草むらに鳴けば、別れた家族を思い出して、客人たる我の眼には、いつのまにか涙が溢れ流れていた。

郷里を去って、はや二十年、幸運にも乱が平定され、安定した天下にめぐりあうことができた。徳の盛んなる主上は、わたしに侍中というすばらしい役職をお与えくださり、その身辺に侍るといふ特別な恩賞を賜った。金の耳飾りと貂の尾で飾った冠を戴く侍中の身となった我は、玄い冠を戴き、その冠を玄いひもで結ぶ主上に忠誠をお誓いいたそう。

主上の宴会にお供して黄河のほとりまで行き、時には車をかっぱして鄴の都で騒ぎ楽しむ。朝露はいつたいどれほどの期間、葉上に留まっていられようか。日に当てられればすぐに乾いてしまう。そのすぐに乾くさまは、あたかも一つ所に長く留まっていられず、水の流れにさえ逆らえずに、あちらこちらに流されてしまう水面に浮かぶ浮き草のように、もろく頼りないもの。これら朝露と水面の浮き草と同様、まことに、人の人生など儂く、儘ならぬものよ。

されど、主上が恩情厚く臣下どもに接してくださるならば、簡単にはへし折れぬ松の枝や竹の節を見習って、われらも忠節を曲げずに、この朝露のごとき短き命を主上のためにささげましょう。天下泰平の御世、この幸福がすでに安定したものであるからには、主上の徳は、千年の後まで語り継がれることでしょう。

【王侍中(懷德)粲】

張銑^①曰、懷德、謂懷魏武帝之德也。
陸善經曰、魏志曰、魏国建、拜粲侍中也。

張銑曰く、徳を懐うとは、魏の武帝の徳を懐うを謂うなり、と。

陸善經曰く、魏志に、魏国の建つや、粲を侍中に拜すと曰うなり、と。

〔訳〕

張銑は言う、徳を懐うというのは、魏の武帝曹操の徳を偲ぶことを言うのだ、と。

陸善經は言う、『魏志』に、「魏の国が建国されると、王粲を侍中にとりたてた」とある、と。

〔注〕

①集注本は他本と異なり、注釈者の名前が省略されること
はない。以下も同じ。

②『三国志』卷二一・王粲伝に、「魏国既建、拜侍中(魏国の既にして建つや、侍中に拜せらる)」とある。陸善經注とは、「拜」の主語が異なる。陸注では、国が王粲を侍中に任命した、となる。王粲伝では、王粲が侍中に任命された、となる。

0102 【伊昔値世乱、秣馬辞帝京】

李善曰、王粲七哀詩曰、西京乱無象。又曰、遠身適荆蛮。音決、秣、音末。

李周翰曰、値乱、謂董卓作乱、辞帝京、謂避乱荆州。

李善曰く、王粲の七哀詩に曰く、西京は乱れて象無し、と。又た曰く、身を遠ざけて荆蛮に適く、と。

音決にいう、秣は、音末、と。

李周翰曰く、乱に値うとは、董卓の乱を作すを謂い、帝京を辞すとは、乱を荆州に避けるを謂う、と。

〔校勘〕

値乱謂董卓作乱 「値乱謂董卓作乱」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)。

〔訳〕

李善は言う、王粲の「七哀詩」に、「帝の都たる長安は、国政も人の倫理も乱れ、法則もなにもあったものではない」とある。また、同じ詩に、「都から遠く離れ、荆蛮の地に行くことにした」とある、と。

『音決』に、「秣の発音は末(まつ)である」とある。

李周翰は言う、「乱に値う」というのは、董卓が反乱を起こしたことを言い、「帝京を辞す」というのは、反乱による

災害から逃れるために荊州の地に避難することを言うのだ、と。

〔注〕

①王粲の「七哀詩二首」は『文選』卷二三に見える。この句は、其一の第一句。この句に付された李善の注を挙げる。「左氏伝、晋侯問於士弱曰、吾聞之、宋災。於是乎、知有天道可必乎。対曰、国乱無象、不可知也（『左氏伝』にいう、晋侯子弱に問ひて曰く、「吾れ之れを聞けり、宋に災ありと。是ここに於けるや、天道の必ず有るを知らんや」と。対えて曰く、「国の乱れて象無くんば、知るべからざるなり」と）。『左伝』の原文は、襄公九年に、「公曰、可必乎。対曰、在道。国乱無象、不可知也」とある。また、李善注に、「道経曰、執大象、天下往。河上公注曰、執、守也。象、道也。聖人守大道、則天下万民、移心帰往也（『道経』に曰く、「大象を執れば、天下往けり」と。河上公の注に曰く、「執とは、守なり。象とは、道なり。聖人大道を守れば、則ち天下の万民、心を移して帰往せり」と）とある。つまり、「象」とは、「道」であり、人の守るべき倫理・法則と解釈できる。なお、『道経』とは『老子』のこと。王粲の「七哀詩」は「豺虎方遘患（豺虎方に患ひを遘ふ）」と続く。「豺虎」は凶暴な人間に例えられる。ここでは、献帝を擁立して長安で権勢を振るつた董卓らと、董卓の死後に権力をもつた郭汜らをいうだろう。このことから、江淹詩の本文にある「乱」とは、実質的な戦争の脅威だけではなく、凶暴な人々が跋扈する不道德な

世の中、国政の乱れなどをも指している」と解釈できよう。

②王粲の「七哀詩」其一の第四句。王粲が長安を去って荊州（湖北省）に行った記事は、『三国志』王粲伝に見える。「獻帝西遷、粲徙長安……年十七、司徒辟、詔除黃門侍郎、以西京擾乱、皆不就。乃之荊州依劉表（獻帝の西に遷るや、粲も長安に徙る……年十七なるとき、司徒辟し、詔もて黄門侍郎に除するも、西京の擾乱するを以て、皆就かず。乃ち荊州に之きて劉表に依る）」。長安を去つた理由を、伝の「西京擾乱」に見出すことができる。このことから、江淹詩の本文にある「乱」が戦争のみを指すものではないことが分かるだろう。

③董卓のこと。『集注』に「薰」とあるのは、書き損じによる誤りだろう。なお、董卓が起こした反乱とは一八九年に洛陽で起こしたクーデターを言うものだろう。また、董卓が洛陽に迫る袁紹らの軍を警戒して、献帝を長安に遷したのは一九〇年のことであり、董卓が呂布に殺されるのは一九二年のことである。江淹が長安を去つたのは一九四年のことであり、董卓の死後二年後のことである。この史実から考えるに、江淹詩の「値世乱」を、董卓の反乱にあつたと解釈するのは、少し無理があるように思われる。

034 【既傷蔓草別、方知杖杜情】

李善曰、毛詩序曰、野有蔓草、思遇時也。君之沢不下流、民窮於兵革、男女失時、不期而会焉。毛詩曰、有杖之杜、其

葉萋々。王事靡盬、我心傷悲。

音決、蔓、音万。杖、大帝反。

呂延濟曰、蔓草・杖杜、皆詩篇名。傷時弊行旅。

陸善経曰、蔓草、別詩。序云、人困於兵革也。杖杜情、言兄弟之親也。詩云、有杖之杜、其葉濟々。獨行踽々、豈無他人、不如我同父。

李善曰く、毛詩の序に曰く、野有蔓草は、時に遇うを思うなり。君の沢ゆみ下流せず、民は兵革に窮し、男女は時を失うも、期せずして会せん、と。毛詩に曰く、杖たる杜有り、其の葉萋々たり。王事は盪もよきこと靡し、我が心は傷悲す、と。

音決にいう、蔓は、音万。杖は、大帝の反、と。

呂延濟曰く、蔓草・杖杜は、皆詩の篇名なり。時弊を行旅に傷む、と。

陸善経曰く、蔓草とは、別れの詩なり。序に云う、人は兵革に困しむなり、と。杖杜の情とは、兄弟の親しきを言うなり。詩に云う、杖たる杜有り、其の葉濟々たり。独り行きて踽々たり、豈に他人無からんや、我が同父に如かず、と。

〔校勘〕

思遇時也 「思洞時也」(国子監本)。

君之沢不下流 「君之沢未流」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本)。

有杖之杜其葉萋々 「有杖之杜其葉萋萋」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)。

蔓草杖杜皆詩篇名 「蔓草杖杜 詩篇名」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)。

傷時弊行旅 「傷時敝於行旅也」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)。

〔訳〕

李善は言う、『毛詩』「野有蔓草」の序に、「野有蔓草は、良い時に巡りあえることを思う歌なのである。天子の恩沢が下々まで行き渡らず、民衆は戦争に苦しみ、男は戦争に駆り出されてしまうので、男女が一緒になれる時期を逃してしまふ。しかし、思わぬ運命の巡りあわせで、男女は出会えるだろう」とある。また、『毛詩』に、「赤々と実る山りんご、その葉もふさふさと茂る。天子の部隊が脆いなどとはありえない、ああ、帰らぬあなたを思つては、わたしのこころは痛むのです」とある、と。

『音決』に、「蔓の発音は万(まん)。杖は、大帝たいていの反(てい)である」とある。

呂延濟は言う、「蔓草」・「杖杜」は共に『詩経』の篇名である。時世の乱れを旅中に悲しむのである、と。

陸善経は言う、「蔓草」は、別れを詠った詩である。唐風「杖杜」の序に、「人々は戦争に苦しんでいる」とある。「杖杜の情」とは、兄弟の仲睦まじい情のことをいうのである。

『詩経』に、「赤々と実る山りんご、その葉もふさふさと茂る。独り旅に出てとぼとぼ歩く、まわりに人がいないわけではないが、やはり同じ父から生まれた兄弟には及ばぬよ」と

ある、と。

〔注〕

① 既A方B（今・その時）A（すること）となつて、そこではじめてBする。ここでの「既」は、「及（く）という時になつて」に近い用法。清・呉昌瑩『経詞衍釈補遺』に、「既、通『暨』、『及』也。『書』、『既弥留、恐不獲誓言嗣』。謂及弥留之際（既は、『暨』に通ず、『及』なり。『書』にいう、『既に弥しく留まりて、誓言し嗣ぐを獲ざらんことを恐る』と。弥しく留まるの際に及ぶを謂う）」とある。また、蕭旭『古書虚詞旁釈』巻五に、「既猶及也。訓見『経詞衍釈』・『古書虚字集釈』『暨』字條。至也」とあり、『文選』巻三六、王融「永明十一年策秀才文五首」其四を引いて言う、「『将以既道而權』。李善注引『論語』、『未可与適道……未可与權』。既道猶及道、与『適道』意合（『將に既に道あるを以てして權らんとす』と。李善注に『論語』を引きていう、『未だ与に道に適くべからず……未だ与に權るべからず』と。既道は猶ほ及道のごとし、『道に適く』の意と合せり）」と。なお、『文選』の文章は、「人として守るべき道の体得者となることで、物事の軽重を適正に考えることができるだろう」の意。「くとなる」が「既」の訳に当たると。

② 国子監本は、「思洞時也」となつてゐる。「洞」には、悟るといふ意味がある。この文章を、あえて訳せば、「良い時期を察知できることを願う」となるだろうか。

③ 尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本は、「君之

沢未流」となつてゐるが、胡克家の『文選考異』巻六には、「茶陵本、未作不・下二字、是也。袁本亦誤未（茶陵本の、「未」もて「不」・「下」の二字に作るは、是なり。袁本も亦た「未」に誤まる）」とあり、「不下」となつてゐるのが正しいとする。また、毛序の原文も「不下」となつてゐる。

④ 『詩経』鄭風「野有蔓草」の毛序の原文は「思不期而会焉（期せずして会するを思う）」。底本・尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本ともに「思」の字が欠けてゐる。『鄭箋』に「不期而会、謂不相与期而自俱会（期せずして会すとは、相与に期せずして自ずから俱に会するを謂う）」とある。あるいは、『鄭箋』の最初の四文字を誤つて挿入したか。

⑤ 『詩経』小雅・鹿鳴之什「杕杜」の第二章、第一、四句。なお、「杕杜」という篇名は、ほかに唐風に「杕杜」「有杕之杜」がある。

⑥ 『詩経』唐風「杕杜」の第一章。『詩経』の原文は「有杕之杜、其葉湑湑」となつてゐる。意味は変わらない。なお、⑤の李善が引く小雅の「杕杜」は、出征して帰らぬ夫を心配する思いを述べたものである。そして、陸善経の引く唐風の「杕杜」は、兄弟を思う情を歌う詩である。江淹の詩と、当時の王粲の事跡から考えてみると、王粲は出征したわけではない。また、王粲の「七哀詩」其一に、「西京乱無象、豺虎方遘患。復棄中国去、遠身適荆蛮。亲戚对我悲、朋友相追攀（西京は乱れて象無く、豺虎は方に患いを遘う。復た中国を棄てて去り、身を遠ざけて荆蛮に適く。亲戚は我に対して悲

しみ、朋友は相追攀す」とあり、王粲は長安を去るとき、親戚や友達と離別していることが分かる。両者の注と、江淹詩・王粲の事跡とを対比してみると、注の当否は陸善経に軍配があたりそうである。注目すべきは、江淹が「已傷蔓草別、方知杖杜情」という句を制作したことから、彼が「雑体詩」を作るとき、王粲個人の伝記のみならず、その作品である「七哀詩」にも取材していただろう、ということである。江淹の各詩人に対する綿密な考察が窺える。

0506 【嶠函復丘墟、冀闕緬從横】

李善曰、嶠函、二嶠及函谷也。呂氏春秋、燭過曰、吳為丘墟。西征賦曰、冀闕緬其湮尽。

音決、嶠、下交反。函、音咸。緬、亡善反。從、子容反。劉良曰、嶠山函谷關、及秦所造冀闕、皆化為丘墟。緬從横、謂乱也。

陸善経曰、史記云、商君為秦築冀闕宮庭於於咸陽。從横、言頽毀也。

李善曰く、嶠函とは、二嶠及び函谷なり。呂氏春秋にいう、燭過曰く、吳は丘墟と為れり、と。西征の賦に曰く、冀闕は緬として其れ湮尽す、と。

音決にいう、嶠は、下交の反。函は、音咸なり。緬は、亡善の反。從は、子容の反、と。

劉良曰く、嶠山の函谷關、及び秦の造る所の冀闕、皆化し

て丘墟と為る。緬として從横とは、乱るるを謂うなり、と。陸善経曰く、史記に云う、商君は秦の為に冀闕宮庭を咸陽に築く、と。從横とは、頽毀するを言うなり、と。

【校勘】

嶠函二嶠及函谷也 「嶠函嶠谷及函谷也」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)。

緬從横謂乱也 「緬微兒縱横謂乱也」(陳八郎本)。

「緬微也縱横謂乱也」(明州本・秀州本)。

「緬微也縱横謂乱」(建州本)。

【訳】

李善は言う、「嶠函」とは、二嶠と函谷のことである。『呂氏春秋』に、「行人燭過が、『吳は今や丘と成り果てたましたぞ』と言った」とある。潘岳の「西征の賦」に、「宮殿の門はぼろぼろで崩れ果てている」とある、と。

『音決』に、「嶠は、下交の反(こう)である。函の発音は咸(かん)である。緬は、亡善の反(べん)である。從は、子容の反(しよう)である」とある。

劉良は言う、嶠山の函谷關、および秦国が築いた宮殿の門は、すべて、時を経てただの丘となったのだ。「緬として從横」とは、乱れていることを言うのである、と。

陸善経は言う、『史記』に、「商鞅は秦国のために立派な門と宮殿を咸陽に建設した」とある。「從横」というのは、崩れ壊れることを言うのである、と。

〔注〕

①『集注』にある「二嶠」も「嶠谷」と同じく、嶠山のこと。河南省洛寧県にあり、西は陝県の境、東は澗池県の境にある。函谷関の東にある嶠山には、南北に二つの陵があるため、「二嶠」という。『左伝』僖公三十二年、秦国の穆公が鄭国に遠征しようとした時の記事に、「召孟明・西乞・白乙、使出師於東門之外。蹇叔哭之曰、孟子、吾見師之出而不見其入也。公使謂之曰、爾何知。中寿、爾墓之木拱矣。蹇叔之子与師、哭而送之曰、晉人禦師必於殽、殽有二陵焉。其南陵、夏后皋之墓也。其北陵、文王之所辟風雨也。必死是間、余收爾骨焉。秦師遂東（孟明・西乞・白乙を召して、師を東門の外より出でしむ。蹇叔は之れを哭して曰く、「孟子よ、吾れ師の出づるを見るも其の入るを見ず」と。（穆）公は之れに謂わしめて曰く、「爾何ぞ知らんや。中寿なれば、爾が墓の木は拱ならん」と。蹇叔の子も師と与にす、哭して之れを送りて曰く、「晋人は師を禦ぐに必ず殽に於いてせん、殽に二陵有り。其の南の陵は、夏后の皋の墓なり。其の北の陵は、文王の風雨を辟くる所なり。必ず是の間に死せり、余は爾が骨を收めん」と。秦師は遂に東す）」とある。実はこの時、通り道である嶠山は晋国の領土であり、晋国の兵隊はここで、秦国を待ち構えていた。また、「二嶠」の使用例は『文選』中にすでに見えている。班固「西都賦」（卷一）に、「漢之西都在於雍州、寔曰長安。左據函谷・二嶠之阻云云（漢の西都は雍州に在り、寔れ長安と曰う。左は函谷・二嶠の阻しきに

拋る）」とある。

②燭過は行人燭過（人名）、晋の人で、趙簡子に仕えた。彼の名前は『呂氏春秋』貴直論第三に見える。しかし、「呉為丘陵」の言葉述べている記事は見えない。ただ、同様の注釈が、『文選』の李善注にいくつか見える。一例を挙げよう。左思「呉都賦」（卷五）、「何則、土壤不足以摂生、山川不足以周衛。公孫国之而破、諸葛家之而滅。茲乃喪乱之丘墟、顛覆之軌轍。安可以儼王公而著風烈也（何となれば則ち、「蜀の」土壤は以て生を摂するに足らず、山川は以て衛りを周ねくするに足らず。公孫は之に国して破れ、諸葛は之に家して滅ぶ。茲れ乃ち喪乱の丘墟、顛覆の軌轍なり。安んぞ以て王公に儼つきて風烈を著わすべけんや）」に付された注に、「呂氏春秋、燭過曰、子胥諫而不聽、故呉為丘墟（『呂氏春秋』にいう、燭過曰く、『子胥の諫むるも（夫差は）聴かず、故に呉は丘墟と為れり』）」とある。『呂氏春秋』の言葉は、あるいは佚文なのかもしれない。

③底本には、虫食いがあり、文字が判別できない。他本に拠って「西」字を補った。

④潘岳「西征賦」は『文選』卷一〇に見える。なお、「西征賦」の「窺秦墟於渭城、冀闕緬其埋尽（秦墟を渭城に窺えば、冀闕は緬として其れ埋尽す）」に付された李善注に、「聲類曰、墟、故所居也。史記曰、秦孝公作為咸陽、築冀闕。緬、尽貌也（『声類』に曰く、「墟とは、故と居する所なり」と。『史記』に曰く、「秦の孝公は咸陽に作為して、冀闕を築く」と。緬とは、尽くる貌なり）」とある。この注から、「緬」が、

「尽貌（跡形もないさま）」を表す形容詞であることが分かる。また、⑥に後述するが、李善の引く『史記』は、『史記』の原文通りではない。

⑤ 他本は、概ね「緇、微也。縦横、謂乱也」となっている。「緇」の注として挙げられた「微」には、「衰える」という意味がある。それは「衰微」という熟語からも察せられる。この劉良の注は、李善注よりも直接的に意味を伝える注と言える。しかし、「微」一文字だけでは、想起される意味が多岐に亘りすぎて、かえって誤読を招く恐れがある。この点、いささか不十分な注であるように思える。むしろ、「西征賦」の前例を挙げた李善注のほうが適切な態度であるだろう。「西征賦」ならば、『文選』に収録されているので、意味の確認をすることが容易い。また、『集注』に「微」の字が見えないのは、あるいは、誤読の危険を軽減するために、意図的に「微」の字を欠いたのかもしれない。

⑥ 『史記』卷六八・商君伝に見える。『史記』原文は、「**作**為築冀闕・宮庭於咸陽（作為して冀闕・宮庭を咸陽に築く）」となっている。陸善経の引く注には、「作」の字がなく、「商君」の二字が加えられている。これは、動作の主語をはっきりさせるためだと思われる。題下注の王粲伝の引用例を考慮するに、陸善経注は、原文において主語・目的語が曖昧な場合、それらを明確にしようと試みていた可能性もある。今後、陸注には注意を払わねばならない。それから、『集注』では、「於」の字が二つ続いている。これは、陸善経の注がもともとと二文字続いていたのではなく、筆者した人物の誤りである

ことが明確に分かる。なぜならば、二字目の「於」の右側に「：（みせけち）」が付いているからである。これは、書き誤った箇所を記しを付けて、何をどのように誤ったかを残す訂正方法である。他の用例で、比較的容易に見ることが出来るものに、蘇軾の「李太白仙詩卷」（二玄社）などがある。なお、『史記』の原文は、すこし分かりづらい。そのため、李善注も陸善経注も、どちらも原文とは異なった形で引用している。これは、引用を誤った可能性もある。しかし、読者に分かりやすいように、意図的に改良した可能性があることも考えべきだろう。二者の注は「作為」の語を中心として、原文と異なっているように思われる。一般的に考えられる「作為」の意味は、「つくる」、「行為」の二つである。ちなみに、「く」とみなす」という用法は現代の用法である。「つくる」という意味で考えた場合、『史記』の原文は「築」がすぐ下に置かれているため、意味の重複が起こってしまい、意味を解しづらくなる。そのため、陸善経は「作」の字を削って、「為」を「ために」と解釈して、引用したのである。陸注で読めば、原文・李善注を含む三者の中で、最も分かりやすい文章だと言える。一方、李善注は、「作為」と「築」の二者にそれぞれ目的語を配置して、意味の重複の解消を図っているように思われる。李善注を口語訳すれば、「咸陽に宮殿を作り、そして立派な門も築いた」となるうか。しかし、どちらの解釈も正しいとは言いがたい。恐らく、『史記』の原文どおりに解釈するならば、「作為」は「意識的に行動を起こして」と読むべきだろう。つまり、「専ら」とか「敢えて」

というのに近い用法だと思われる。ここで、李善注と陸善経注を見比べてみると、李善注は原文の形からあまり離れておらず、陸注は解釈を助けるために原文から大いに離れているように感じられる。このことから、陸注は、解釈を助けるために注釈を意図的に改善しているのではないか、という可能性を見出せるのである。

078 【倚棹泛涇渭、日暮山河清】

李善曰、方言曰、楫謂之櫂。棹与櫂同。

音決、倚、於綺反。棹、直孝反。泛、芳劍反。渭、音謂。

呂向曰、倚棹、悵望之意。涇渭、二水名。

李善曰く、方言に曰く、楫之れを櫂と謂う、と。棹は櫂と同じ、と。

音決にいう、倚は、於綺の反。棹は、直孝の反。泛は、芳劍の反。渭は、音謂なり、と。

呂向曰く、棹に倚るとは、悵望の意なり。涇渭とは、二水の名なり、と。

【校勘】

楫謂之櫂 「楫謂之櫂」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)。

【訳】

李善は言う、揚雄の『方言』に、「楫を櫂と言うのだ」とある。棹は櫂と同じものである、と。

『音決』に、「倚は、於綺（あゝい）の反（あゝい）である。棹は、直孝の反（とう）である。泛は、芳劍の反（へん）である。渭の発音は謂（い）である」とある。

呂向は言う、「棹に倚る」というのは、悲しげに遠くを眺めやるという意味である。「涇渭」というのは、涇水と渭水、二本の川の名前である、と。

【注】

①揚雄『方言』卷九は、「楫謂之櫂、或謂之櫂（楫之れを櫂と謂い、或いは之れを櫂と謂う）」とある。

②「泛」の反切は、『広韻』では、「孚梵切」であり、発音は「はん」となる。『音決』の反切では、現代語の音に当てはめても「hian4」となり、現在の音（少なくとも普通話）にはないものとなる。あるいは、失われた音なのかもしれない。

③この呂向注は、陳八郎本（五臣單注本）は、次の第九、一〇句の後に配されている。これは、第七、一〇句までの注釈者が同じ呂向であるためである。陳八郎本以外の版本が、注を分けているのは、この第七、八句に李善の注が入るため、必然的に呂向注も分けることしたのである。

④涇水は甘肅省から陝西省に入り渭水に注ぐ川。渭川は甘肅省から発して陝西省を東に流れ、洛水に合流して、潼関県

で黄河に注ぐ川。

09 10 【蟋蟀依萊野、蔽風吹苦莖】

李善曰、毛詩曰、七月在野、八月在宇。鄭玄曰、謂蟋蟀也。毛詩曰、蝓々者蜀、烝在桑野。賈逵國語注曰、苦、木脆也。

音決、蟋、音悉。蟀、音率。莖、戸庚反。

呂向曰、蟋蟀、悲愁之虫也。蔽風、急風。枯莖、枯木之莖、喻脆也。

今案、五家・陸善經本、苦為枯。

李善曰く、毛詩に曰く、七月野に在り、八月宇に在り、と。鄭玄曰く、蟋蟀を謂うなり、と。毛詩曰く、蝓々たる蜀は、烝しく桑野に在り、と。賈逵の國語注に曰く、苦とは、木の脆きことなり、と。

音決にいう、蟋は、音悉。蟀は、音率。莖は、戸庚の反なり、と。

呂向曰く、蟋蟀とは、悲愁の虫なり。蔽風とは、急風なり。枯莖とは、枯木の莖なり、脆きに喩うるなり、と。

今案ずるに、五家・陸善經本は、苦もて枯と為す。

【校勘】

謂蟋蟀也 「謂蟋蟀」(尤刻本・胡刻本・國子監本・明州本・秀州本・建州本)。

蝓々者蜀烝在萊野 「蝓蝓者蜀烝在桑野」(尤刻本・胡刻

本・國子監本・明州本)。

「蝓蝓者蜀烝在桑野」(秀州本・建州本)。

苦木脆也 「若木晚矣」(尤刻本・胡刻本・國子監本・明州本・秀州本・建州本)。

喻脆也 「喻危脆也」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)。

【訳】

李善は言う、『毛詩』に、「こおろぎは七月には野原に居り、八月には軒下に居る」とある。鄭玄の注には、「この詩はこおろぎのことを言っているのだ」とある。『毛詩』に、「うごめく青虫は、長いこと桑野原にいる」とある。賈逵の『國語』注に、「苦とは、木のもろく弱いことである」とある、と。『音決』に、「蟋の発音は悉(しつ)。蟀の発音は率(しゅつ)。莖は、戸庚の反(こう)である」とある。

呂向は言う、「蟋蟀」とは、悲しみを引き起こす虫である。「蔽風」とは、きびしく吹きすさぶ風である。「枯莖」とは、枯れ木の莖であり、もろく弱々しいことに喩えられる、と。

今調べてみるに、『五家注(五臣註)』本と陸善經注本は、「苦」の字を「枯」としている。

【注】

①『詩經』豳風・「七月」、第五章第三・四句。他本は「鄭玄曰、謂蟋蟀」となっており、「也」の字がない。ただし、『鄭

箋』には「皆謂蟋蟀也」とあるので、『集注』本のほうが、『鄭箋』の原文に忠実であるようだ。

②『詩経』幽風・「東山」、第一章第九・一〇句。『詩経』の原文は、「蝓蝓者蝓、烝在桑野」となっている。『集注』本は、「蜀」の字の左半分に虫食いがあるため、本来の字は分らない。あるいは「蝓」字だったかもしれない。ならば、原文を忠実に引いていると言える。なお、李善がなぜ「東山」を引いたのか分からない。ただ「桑野」の前例を示しただけだろうか。

③『国語』は『左伝』と並ぶ古い歴史書である。作者は左丘明と言われているが、定かではない。後漢の時、『国語』に注を付けた者に、鄭衆・賈逵があり、魏晋の時には、王肅・唐固・虞翻・韋昭・孔晁などがある。李善が引く賈逵注は佚文である。他本は、「若、木晚矣」（若とは、木の晩るるなり）となつている。どちらが正しいのかは、もはや分からない。ただ、「脆」であれば、もろく折れやすい、という意味になるだろう。「晚」であれば、枯れる、という意味になる。桑の葉が盛んなのは春のことであり、こおろぎが鳴くのは秋のことである。江淹詩に「蟋蟀」の語があることから考えるに、「晚」となっている方が正しいように思える。『集注』が「脆」となっているのは、「晚」と字体が似ているため、誤って写したか、呂向注に「喻脆也」とあることに妥当性を感じて改めたか、または底本にしていたものが「脆」となっていたか、この三つの可能性が考えられる。

④この「風」の字は、「急」字と「枯」字の傍らに添え書

きされている。あるいは、最初、「蔽、風急（蔽とは、風の急なるものなり）」と句読を切つてしまい、後に誤読に気付いて、「風」字を添え書きしたのでだろうか。

⑤他本は「喻危脆也」となっているが、意味は変わらない。

112 【鶴鷓在幽草、客子淚已零】

李善曰、鶴鷓在幽草、謂鶴鳴于埵也。鷓亦水鳥。故連言之。王仲宣軍戎詩曰、哀彼東山人、喟然感鶴鳴。毛詩曰、有芄者狐、率彼幽草。

音決、鶴、古翫反。鷓、五的反。

張銑曰、幽草、深草也。客子、謂祭也。淚已零、悲乱也。

李善曰く、鶴鷓は幽草に在りとは、鶴の埵に鳴くを謂うなり。鷓も亦た水鳥なり。故に連ねて之れを言う。王仲宣の軍戎の詩に曰く、彼の東山人を哀しみ、喟然として鶴の鳴くに感ず、と。毛詩に曰く、芄たる狐有り、彼の幽草に率う、と。

音決にいう、鶴は、古翫の反。鷓は、五的の反、と。

張銑曰く、幽草とは、深草なり。客子とは、祭を謂うなり。涙已に零つとは、乱を悲しむなり、と。

〔校勘〕

謂鶴鳴于埵也 「謂鶴鳴于埵」へ尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本。

軍戎詩 「從軍詩」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)。

張銑曰 「張銑曰鶴鷓水鳥名幽草」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

「訳」

李善は言う、「鶴鷓は幽草に在り」というのは、このとりが蟻塚のあたりで鳴くことを言うのである。鷓も鶴と同じく水鳥である。だから、二字つなげて鶴鷓と言うのだ。王粲の「從軍詩」に、『詩経』に歌われた『東山』の人々の悲しみに思いを馳せて心を痛め、いま彼らと同じ境遇の我が身を嘆き、このとりが鳴くのを聞いては、心が締め付けられる思いである」とある。『毛詩』に、「小さな狐がいるよ、もともとあの奥深い草むらに棲む習性があるんだよ」とある、と。『音決』に、「鶴は、古甌の反(かん)である。鷓は、五

的の反(げき)である」とある。張銑は言う、「幽草」というのは、奥深い草々である。「客子」というのは、王粲のことを指して言うのだ。「涙已に零つ」というのは、冒頭に説かれる「乱」を悲しんでいるのである、と。

「注」

①「鶴鳴于埵」の句は、『詩経』豳風・「東山」、第三章第五句。「東山」は、戦争に出て帰れぬ夫が、故郷を思う詩である。注に引かれた句は、「鶴鳴于埵、婦歎于室(鶴は埵に

鳴き、婦は室に歎ず)」とつづく。このとりが蟻塚で鳴くのは雨がふる前兆で、雨は出征した夫を苦しめる。そのため、一人で家を守る妻は、苦しむ夫を思つて悲しむのである。夫はその悲しんでいるであろう妻を思い描くのである。

②他本は「從軍詩」となっている。「從軍」が正しいだろう。ただ、『文選』は、王粲の「從軍詩」の類型を「軍戎」として挙げているので、写本の作者がこれと混同した可能性もある。王粲の「從軍詩五首」は『文選』巻二七に見える。引用された句は、其二の第一・一二句である。この句は戦争に赴いて、『詩経』「東山」に歌われる思いが分かった、という意味である。王粲にこの句があるため、李善は王粲詩と江淹詩を関連づけるため、「鶴鷓」の注に「東山」を引用したのだろう。王粲の詩を考察の対象に入れた、周到な注といえる。しかし、この注は江淹詩の注としては適当でないように思われる。なぜなら、江淹の模倣詩に設けられた副題は「懷德」であり「從軍」ではない。江淹詩は、王の徳に関心を寄せる構成となっていると解釈するべきである。もし、「鶴鷓」に典故を求めるならば、『詩経』陳風・「防有鵲巢」を挙げることでできよう。『鄭箋』に拠れば「防有鵲巢」は、君主が讒言を信じるので、佞臣がまわりに寄つてくるのを嘆いた詩である。第一章を挙げる、「防有鵲巢、邛有旨苕。誰侑予美、心焉切切(防に鵲巢有り、邛に旨苕有り。誰れか予が美を侑かす、心は焉に切切たり)」。防は町の名で、ここには樹木が茂っているため、巢が作りやすく、自然と鵲(かささぎ)が集まってくる。同じように、讒言を信じる君主が治めるとこ

ろは、佞臣にとつて居心地がいいので、自然と悪臣が集まってしまうのである。そのため、作者は心を痛める。ここで、江淹詩の主人公がなぜ「客子」となったのか振り返ってみたい。主人公は世の乱れにあつて旅人となつたのである。この乱れは、戦争を指すのではなく、徳の衰えた世の中を指すのであつた。このことから、従軍の嘆きを歌う「東山」よりも、君主の不徳を嘆いた「防有鵲巢」の方を典故とするほうが良いのではなからうか。「鶴鷓」と「鵲」とは、必ずしも同列に並べることはできないだろう。しかし、後代「鶴鷓」と熟した呼び名の鳥がある。「鶴鷓」と「鵲」とは必ずしも同じものとは言えないが、必ず違ふとも言えまい。また、江淹詩の「鶴鷓」が、『詩経』の「東山」同様に「埵」のあたりにいるならば、「東山」の典故にも妥当性を見出せよう。しかし、「鶴鷓」は「幽草」に潜んでいるのである。「幽草」は奥深い草むらである。「幽草」からは、禁宮が想起される。江淹詩は、「鶴鷓（佞臣）」が「幽草（宮殿）」に蔓延る世の中に心を痛め、涙を落としたのではないだろうか。

③ 『詩経』小雅・魚藻之什・「何草不黄」、第三章第一・二句。不条理に戦争に駆り出される恨みを述べる。恐らく、先の「東山」と関連させて、李善はこの詩を注に引いたのであろう。李善注が戦争に關係する詩を多く引用することから、唐代にはすでに王粲の詩に「従軍」のイメージがあつたことを窺わせる。

④ 『集注』は、「鶴鷓水鳥名」の句が抜けている。これは、筆写する際に書き損じたか、李善注に「鷓亦水鳥」とあるた

め、不要としたのかもしれない。

134 【去郷廿載、幸遭天下平】

李善曰、楚辞曰、去郷離家來遠客。鮑照結客少年場曰、去郷卅載。礼記曰、国治而天下平。

李周翰曰、載、年。遭、逢。

李善曰く、楚辞に曰く、郷を去り家を離れて来たりて遠く客たり、と。鮑照の結客少年場に曰く、郷を去ること卅載、と。礼記に曰く、国治まりて天下平らかなり、と。

李周翰曰く、載とは、年なり。遭とは、逢なり、と。

〔校勘〕

鮑照 「鮑昭」へ尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本。

去郷卅載 「去郷三十載」へ尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本。

載年遭逢 「載年遭逢也」へ陳八郎本。

「載年也遭逢也」へ明州本・秀州本・建州本。

〔訳〕

李善は言う、『楚辞』に、「郷里を離れて旅をして、異郷の地で異邦人となつた」とある。鮑照の「結客少年場」詩に、「故郷を去つて三十年が経つた」とある。『礼記』に、「国が

安定して、はじめて世の中が平和となるのだ」とある、と。
李周翰は言う、「載」とは、年のことである。「遭」とは、逢うということである、と。

〔注〕

①『楚辞』宋玉「九辯」其二の第三句。『文選』卷三三にも見える。『楚辞補注』では「去郷離家兮徠遠客」となっている。『文選』では「去郷離家兮来遠客」となっている。

②他本は全て、「鮑昭」となっているが、『集注』の方が正しい。「昭」となっているのは、唐の則天武后の諱「墨」の本字を避けたためである。しかし、他本において、他の詩文や注の中には、「照」字が用いられているのは何故か。それは、『文選』を翻刻した尤袤の時代、つまり南宋では、「昭」字は避諱字ではなかつたためである。では、どうして「鮑照」は「鮑昭」のままなのか。宋・張昞『雲谷雜記』卷二に、「鮑昭、本名照。避武后諱、唐人書之、去火只用昭字。後遂以鮑昭・鮑照為二人（鮑昭、本と照と名いう。武后の諱を避けて、唐人之れを書するに、火を去りて只だ昭の字を用う。後遂に鮑昭・鮑照を以て二人と為す）」とあり、宋代では「鮑照」と「鮑昭」を別人としてとらえていたふしがある。そのため、詩文に用いられた「昭」字は「照」字に直すことができても、「鮑昭」だけは、同人物がいると認識されていたため直されなかつたのではないだろうか。なお、唐写本といわれる『集注』が「鮑照」としていたのはどうしてか。陳垣『史諱举例』（中華書局、二

〇〇四年第二版、二〇〇九年第五次印刷）に拠れば、唐の顯慶五年（六六〇）に、嫌名（避諱字に近い発音の文字）を避けずに、古典の文字を編纂する時は、そのままの文字を用いて、意味によって文字を改める必要はないといった詔勅があつたという（一一九頁）。なので、古典を写す時は、避諱字を気にする必要はなかつたのである。ただし、避諱字の使用は、当人の精神的なものに左右されることが多く、避諱によって古典中の文字を改めることは多かつた。また、『史諱举例』に拠れば、欠筆が行われるようになったのは、唐代からだという。

③引用句は該当詩の第七句である。『文選』卷二八に見える。鮑照詩の原文も他本と同じ。

④『礼記』大学篇に見える。『礼記』の原文は「国治而后天下平」となっている。

156 【賢主降嘉賞、金貂服玄纓】

李善曰、賢主、魏太祖也。時粲為侍中。故云金貂。漢書、谷永对詔曰、載金貂之飾、執常伯之職。尉繚子曰、天子、玄冠玄纓。

音決、貂、音彫。

呂延濟曰、嘉賞、謂与之遊宴也。金貂・玄纓、侍中之服飾也。

李善曰く、賢主とは、魏の太祖なり。時に粲は侍中と為る。

故に金貂と云う。漢書にいう、谷永は詔に対して曰く、金貂の飾りを載せ、常伯の職を執らん、と。尉繚子に曰く、天子は、玄冠し玄纓す、と。

音決にいう、貂は、音彫、と。

呂延濟曰く、嘉賞とは、之れと遊宴するなり。金貂・玄纓は、侍中の服飾なり、と。

〔校勘〕

玄冠玄纓 「玄冠玄纓也」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)。

呂延濟曰 「濟曰賢主謂魏武也」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)。

遊宴也 「遊宴」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)。
服飾也 「服飾」(陳八郎本)。

〔訳〕

李善は言う、「賢主」というのは、魏の太祖のことである。当時、王粲は侍中となっていた。そのため、「金貂」と言っているのだ。『漢書』に、「役人に任命する詔に谷永は答えて、『金細工と貂の尾で飾った冠を頭に戴いて、常伯(侍中と同じ)の役職を頂戴いたしとございます』と言った」とある。『尉繚子』に、「天子は、黒い冠と黒い纓を着けるのだ」とある、と。

『音決』に、「貂の発音は彫(ちよう)である」とある。
呂延濟は言う、「嘉賞」というのは、賢主にお供して楽し

み宴の席に侍る特権のことである。「金貂」と「玄纓」は、侍中が着ける飾りである、と。

〔注〕

① 『漢書』卷六八・谷永伝に見える。

② 現存する『尉繚子』にこの言葉は見えない。あるいは、尉繚子(人物)が述べた言葉か。ただ、『隋書』卷一二・礼儀志に、「尉繚子曰、天子玄纓、諸侯素纓(尉繚子曰く、「天子は玄纓し、諸侯は素纓す」と)とある。これによれば、天子が玄纓を着けているときは、諸侯は白い紐をつけねばならないらしい。

③ 他本には、「賢主謂魏武也」の句がある。やはり、筆写する際の書き損じか、李善注と重複するため、故意に省略した可能性が考えられる。

④ この注には疑問がある。唐代では、金貂・玄纓が侍中の身に着けるものだったとしても、それを江淹の詩に当てはめてもよいものだろうか。江淹詩が対句であることを考慮すると、「金貂(侍中)」が「玄纓(天子)」に服従したと解釈するほうが妥当だろう。李善の引く、『漢書』でも、侍中は金貂を戴いているが、玄纓を着けている場面はない。ここは李善注の方が、より妥当性があるように思える。

178 【侍宴出河曲、飛盖遊鄴城】

李善曰、魏文帝与吳質書曰、時駕而遊、北遵河曲。遭子建公

讌詩曰、飛蓋相追隨。

音決、鄴、音業。

劉良曰、飛蓋、車蓋也。

李善曰く、魏の文帝の吳質に与うるの書に曰く、時に駕して遊び、北のかた河曲に遵う、と。遭子建の公讌詩に曰く、蓋を飛ばして相追隨す、と。

音決にいう、鄴は、音業、と。

劉良曰く、飛蓋とは、車蓋なり、と。

〔校勘〕

遭子建 「曹子建」へ尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本。

飛蓋車蓋也 「飛蓋車蓋」へ陳八郎本。

〔訳〕

李善は言う、魏の文帝の「吳質に与うるの書」に、「春、果実の多く実るこの時に、車を走らせて出かけ、北の方角へ河のほとり（河のすみ、湾曲した部分のこと）に沿って行く」とある。曹子建の「公讌詩」に、「車を飛ばして、前を走る車の後を追いかけていく」とある、と。

『音決』に、「鄴の発音は業（ぎょう）である」とある。劉良は言う、「飛蓋」とは、車の傘（屋根・おおい）である、と。

〔注〕

①引用の正式な題名は、「与朝歌令吳質書」である。『文選』卷四二に見える。なお、「河曲」について、江淹詩では、「鄴城」の「鄴」と対構造になっていると考え、「河」を「黄河」とし、「黄河のほとり」と解釈したが、単に「河のほとり」と解釈しても良いだろう。また、「河曲」という地名もある。これは、春秋時代の晋の地で、文公一二年の冬、秦と晋が戦をした場所。現在の山西省永濟県西の蒲州から、芮城県西の風陵渡のあたりにあった。黄河が北から南に流れ、このあたりで、東に湾曲して流れるから「河曲」という。一見、「鄴の都」の対として「河曲」をとらえるならば、固有名詞の「河曲」と解釈したほうが良いように思える。しかし、魏の都であった「鄴（河南省臨漳県）」と「河曲（山西省）」とは地理的に離れており、また、史書を見る限りでは、曹丕・曹植、及び王粲とは関連性も見られない。そのうえ、「河曲」を固有名詞としてとらえると、実はきれいな対構造にはならない。「鄴城」が、この二文字で固有名詞と解釈されるならば、問題は無い。しかし、この二文字の構造は、実際には「鄴（固有名詞）＋城（まち・都市）↓一般名詞」であり、「河（黄河↓固有名詞）＋曲（隅・ほとり）↓一般名詞」と解釈した方が対構造としては整ったものになるのである。「河曲」を固有名詞にとることも不可能ではないかも知れないが、ここでは、江淹詩の「河曲」を「黄河のほとり（または、河のほとり）」と解釈することにした。さらに、もう一つ、「河のほとり」と解釈できる根拠がある。それは第一七句に「侍宴」の

語があることである。これは、所謂「曲水宴」を意識したものと考えられる。「曲水宴」とは、三月三日に川辺に集まり、川に杯を浮かべて流したり、詩文を作ったりして楽しむ宴のことで、三月三日の上巳節に川辺で日頃の穢れを祓う禊ぎ払いの儀式が元になっている。有名なのは、王羲之の蘭亭での宴だが、「曲水宴」は、戦国時代からあつたようである。晋の武帝が「曲水宴」の来源を訪ねると、束皙が次のように答えた、「秦昭王三日置酒河曲、見有金人出。奉水心劍曰、令君制有西夏。乃因此处、立為曲水。二漢相沿、皆為盛集（秦昭王（秦武王の弟）三日河曲に置酒し、金人の出づる有るを見る。（金人）水心の劍を奉じて曰く、君をして西夏を制有せしめん、と。乃ち此の処に因みて、立ちて曲水と為せり。二漢相沿ひて、皆盛集を為す）」（『文選』卷四六、顔延年「三月三日曲水詩序」李善題下注引、『統齊諧記』）。以上のことから、江淹詩の第一七句は、河のほとりで曲水の宴を催したのだと解釈できる。なお、右に引用した『統齊諧記』の文章は、『芸文類聚』卷四・歳時部・三月三日にも見え、多少文字の異同がある。例えば、『文選』には、「乃因此处、立為曲水（この場所（河曲）に基づいて、（三月三日に川辺で宴を催すことが）曲水の宴として伝わっているのである）」とあるが、『芸文類聚』では、「及秦霸諸侯、乃因此处、立為曲水祠」となっている。なお、『文選』引『統齊諧記』文中の語は以下のように解釈した。「制有」は、支配して保有すること。「乃」は、「以上のことがあつて、そこでである」の意。「因」は、「〜に基づいて」、「〜を由来とする」の意で、「よ

つて・よる」とも訓じる。「立為」は、後世まで伝わること。「二漢」は、前漢・後漢のこと。「盛集」は、盛大な宴の意。
 ② 曹子建のこと。書き間違いであろう。
 ③ 『文選』卷二〇に見える。

1920 【朝露竟幾何、忽如水上萍】

李善曰、漢書、李陵謂蘓武曰、人生如朝露。楚辞曰、竊哀兮浮萍、汎濫兮無根。王逸曰、自比如蘋。隨水浮遊、乍東西也。

音決、萍、歩銘反。

呂向曰、朝露、日出則乾、人命短促亦猶是焉。忽、疾兒。水萍、喻無依託。

李善曰く、漢書にいう、李陵の蘇武に謂いて曰く、人生は朝露の如し、と。楚辞に曰く、窃かに哀しむ浮萍の、汎濫して根無きを、と。王逸曰く、自ら蘋に比す。水に随いて浮遊し、乍ち東西す、と。

音決にいう、萍は、歩銘の反、と。

呂向曰く、朝露とは、日の出づれば則ち乾く、人が命の短促なること亦た猶お是くのごとし。忽とは、疾なる貌なり。水萍とは、依託すること無きに喩う。

「校勘」

浮萍 「浮萍」へ尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀

州本)。

王逸曰「王逸注曰」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)。

自比如蘋随水浮遊乍東西也「自比」蘋随水浮汎乍東西西(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)。

〔訳〕

李善は言う、『漢書』に、「李陵が蘇武に、『人の生命とは朝に降りる露のようなものだ』と言った」とある。『楚辞』に、「内心痛ましく思う、浮き草が水面にたゆたい、根を下ろして落ち着くことのできないことを」とある。王逸の注に、「これは作者自身を、浮き草に喩えているのである。波にまかせてたゆたい、あつちこつちゆくのだ」とある、と。

『音決』に、「萍は、歩銘の反(へい)である」とある。呂向は言う、「朝露」というのは、太陽が昇ればすぐさま渴いて消えてしまう、人の命の短くてすぐに終わってしまうのも朝露と同様である。「忽」というのは、はやいさまである。「水萍」というのは、拠り所なく頼りないことに喩えるのである、と。

〔注〕

①『漢書』卷五四・蘇武伝に見える。

②『楚辞補注』九懷「尊嘉」に見える。九懷は屈原ではなく王褒の作。よって、朱熹の『楚辞集注』には九懷がなく、また、『文選』にも収録されていない。「尊嘉」の原文は、「竊

哀兮浮萍、汎淫兮無根」となっている。意味は変わらない。なお、校勘に、「萍」の字を挙げたのは、『広韻』では、「萍」と「萍」が、別の韻目に配されているためである。

③「自比如蘋」は、『楚辞補注』では、「竊哀兮浮萍」の句に附された注。「比如」は、「くになぞらえる」・「く」に喩える」の意で、「譬喩」と同義。あるいは、「如」を「於」と同義に解釈できるかもしれない。どちらにせよ、他本のように、「比」一文字でも意味は変わらない。なお、「比如(比せば)の如し」と訓読すれば、「まるでくのようにだ」となり、この用法は、『史記』卷一二四・遊俠列伝に既に見える。しかし、ここでは文脈に合わない。

④この文、『楚辞補注』では、「汎淫兮無根」の句にに附された注。『補注』王逸注の原文は、「浮遊」が「浮汎」となっており、「乍東西也」となっている。「乍東乍西」となっている他本は、『補注』の原文を分かりやすく補った形になる。「乍A乍B」は「AしたりBしたりする」となる。

⑤「忽」を、呂向は「疾貌(はやい様子)」と注しているが、注の通り「すぐに」とか「はやく」と訳しては「如」の訳が落ちつかない。訳文では、ひとまず、呂向注を考慮して、「すぐに乾くさまは」と訳出しておいた。しかし、「忽如」は二文字で、「まるでくのようにである」の意であり、主語は前の句の「(すぐに乾いてしまう)朝露」とするべきである。「忽如」については、後漢からこの用法がある。例えば、「古詩十九首」(『文選』卷二九)其三に、「人生天地間、忽如遠行客(人の天地の間に生まるるは、忽として遠行の客の如し)」

とある。これは、「人がこの世に生まれ落ちるのは、まるで遠くに旅立ってもどらない旅人のようだ」の意で、人生にはいつか戻る場所（死）がある、つまり限りがあることを喩えたもの。「古詩十九首」の例では、「人は天地の間に生まるれば、忽ち遠行の客の如し」と訓読し、「人はこの世に生まれるたら、その瞬間に遠く旅立つ旅人のようなものなのだ」とも解釈できるかもしれない。しかし、この解釈では、やはり「如」の訳が落ちつかず、また、上の句とのつながりも悪い。さらに例を挙げると、曹植「白馬篇」（『文選』卷二七）に、「捐軀赴国難、視死忽如帰（軀を捐てて国難に赴き、死を視るごとく忽として帰るが如し）」とある。これは、「我が身を省みず戦争に赴き、死を見据えるさまは、まるであるべき場所に帰るかのようだ」の意で、死を当然のことのように受け入れて恐れのない様子に喩える。これらの例文は、常用の「突然」・「急に」、また「すぐに」・「はやく」などの意では解釈ができない。以上の用例を見ても、「忽如」と連用された時は、「まるで」のようだ」と解釈するのが妥当であるように思える。この用法については、王鏐『詩詞曲語辭例釈（第二次修訂本）』（中華書局、二〇〇五）一四〇頁に詳しい。なお、「浮萍（萍）」の持つイメージは、流離って止まる場所のない境遇や、先行きの見えない不安定な人生、また、様々に変化する世の中であり、江淹詩のように、頼りない様子、もろくはかない様子を喩えるのは珍しい。

212 【君子篤惠義、柯葉終不傾】

李善曰、新語曰、君子篤^①於義。礼記曰、其在人也、如竹箭之有筠、如松柏之有心。二者雖貫四時、而不改柯易葉。

音決、柯、古何反。

張銑曰、篤、厚。惠、恩也。言、君子厚其恩義、履其礼度、則如松柏之有心、不改柯葉傾落也。

李善曰く、新語に曰く、君子は義に篤くす、と。礼記に曰く、其の人に在るや、竹箭の筠有るが如くし、松柏の心有るが如くす。二者は四時を貫くと雖も、柯を改め葉を易えず、と。

音決にいう、柯は、古何の反、と。

張銑曰く、篤とは、厚なり。惠とは、恩なり。言は、君子其の恩義を厚くし、其の礼度を履めば、則ち松柏の心有りて、柯葉を改め傾落せざるが如くならん、と。

〔校勘〕

篤於義 「篤義於惠」へ尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本。

傾落也 「傾落」へ陳八郎本・明州本・秀州本・建州本。

〔訳〕

李善は言う、『新語』に、「君子は義理人情を重んじる」とある。『礼記』に、「人にとって重要なことは、その情を堅固な青皮を持つ竹のようにし、芯の通って堅い松や柏の木のよ

うにすることである。竹と松柏とは、たとえ四季を経たとしても、その枝の姿を変えたり、葉の形を変えたりすることは「ないのだ」とある、と。

『音決』に、「柯は、古何の反(か)である」とある。

張銑は言う、「篤」というのは、厚のことである。「恵」というのは、恩のことである。江淹詩の意味は、君子が臣下に対する恩寵や義理を重んじ、臣下に対する礼儀態度を誤らなければ、臣下たちは、芯が通っていて、枝や葉の形を変えて傾いたり落ちたりしない松や柏のように、忠節厚い臣下となるだろう、ということである、と。

「注」

①漢・陸賈『新語』巻下に見える。原文は、「君子篤於義而薄於利、敏於事而慎言(君子は義に篤くして利に薄くし、事に敏にして言に慎しむ)」となっている。

②他本は、「君子篤義於惠(君子は義の恵に於けるに篤くす)」となっており、『新語』の原文とも異なる。他本の李善注の場合、「於」は「与」と同義。清・吳昌瑩『經詞衍釈』卷一に、「於、猶『与』也」とある。例文に『孟子』公孫丑上の、「麒麟之於走獸、鳳凰之於飛鳥……類也(麒麟の走獸に於ける、鳳凰の飛鳥に於けるは……類なり)」を引く。これは、「AはBに関係がある」という用法から派生したと思われる。『孟子』の文章は、「AとBと」と解釈したほうが、「類(同類である)」とのつながりが良い。さて、そこで、他本の李善注を見ると、「義」と「恵」を二つの概念として

捉えていることになる。ならば、「義理」と「恩恵」に分けることができ、江淹詩の訳も、「君子は、臣下に対する義理と、臣下に対する恩賞とを重んじておられる」ということになる。『新語』の原文を引用することにおいては『集注』に分がある。しかし、「恵」の解釈を欠いているため、江淹詩を解釈する上では、「恵」字にも注意を引かせる形となる他本に、分があるように思われる。なお、張銑も「義(礼度)」と「恵(恩義)」を二分化しているようなので、あるいは、張銑注に引きずられる形で李善注が改竄された可能性も考えられる。なお、「恵」と「義」については、『論語』公治長第五に、「子謂子産。有君子之道四焉……其養民也恵、其使民也義(子子産を謂う。君子の道四有り……其の民を養うや恵、其の民を使うや義)」とあり、その『正義』に、「其養民也恵者、三也。言、愛養於民、振乏闕無、以恩恵也。其使民也義者、四也。言、役使下民、皆於礼法得宜、不妨農也(其の民を養うや恵とは、三なり。言は、民を愛養し、乏しきを振い無を闕うに、恩恵を以てするなり。其の民を使うや義とは、四なり。義とは、宜なり。言は、下民を役使するに、皆礼法に於いて宜しきを得て、農を妨げざるなり)」とある。これに抛れば、「恵」は「恩恵(慈しみの情や報賞を与えること)」、「義」は「於礼法得宜(物事の法則を鑑みて正しい判断を下すこと―民に無理のないように配慮すること)」となる。

③引用文は『礼記』礼器篇に見える。原文は「其在人也、如竹箭之有筠也、如松柏之有心也。二者、居天下之大端矣。

故貫四時、而不改柯易葉（二者、天下に居するの大端なり。故に四時を貫きて、柯を改め葉を易えず）^①となつてゐる。

234 【福履既所綏、千載垂令名】

李善曰、王粲公宴詩曰、古人有遺言、君子福所綏。毛詩曰、愷悌君子、福履綏之。左氏伝、子産曰、令名徳之興也。

音決、令、力政反。

李周翰曰、言、能履福自安、故得後垂令名也。

李善曰く、王粲の公宴詩に曰く、古人に遺言有り、君子あれば福の綏する所ならん、と。毛詩に曰く、愷悌の君子、福履之れを綏んず、と。左氏伝にいう、子産曰く、令名は徳の興なり、と。

音決にいう、令は、力政の反、と。

李周翰曰く、言は、能く履福もて自ずから安んずるが故に後に令名を垂るるを得るなり、と。

【校勘】

毛詩曰 毛詩の引用なし（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）。

後垂令名也 「後世垂令名」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）。

【訳】

李善は言う、王粲の「公宴詩」に、「むかしの人は言葉を残した、立派な君子がいれば国の幸福は安定するだろう」とある。『毛詩』に、「徳があつて和らぎ樂しむ君子は、国の幸福を安定させるだろう」とある。『左氏伝』に、「公孫僑は、『立派な名は、徳を載せた車のようなものです』と言つたとある、と。

『音決』に、「令は、力政の反（れい）である」とある。李周翰は言う、江淹詩の意味は、幸福を誰もが知らぬ間に安定させているので、後のちに徳ある立派な名を知らしめることができるのである、と。

【注】

① 『文選』卷二〇に見える。該当句は、第一九・二〇句。

② 「愷悌君子」は、『詩経』大雅・文王之什「旱麓」の句。

「福履綏之」は周南「樛木」第一章第四句。二詩ともに、君子がいるために幸福が定まるといふ内容である。

③ 『左伝』襄公二四年に見える。引用文は、子産が直接口にしたものではなく、手紙上の文章である。

④ 底本は、虫食いがひどく、「力」字の部分を読み取れない。ここは、『広韻』去声四五勁の「令」に、「力政切」とあるのに拠つて補つた。

【余説】

王粲を摸倣した江淹の詩には、「懷徳」の題が附されてゐる。しかし、現存する王粲の作品の中には、「懷徳」と題し

た詩は見えない。江淹はどうして王粲を摸倣した詩に、「懷德」の題を充てたのだろうか。

江淹の摸倣詩に対する詩評家の評価は高い。彼の摸倣詩への評価は、同時代の鍾嶸の『詩品』に、すでに見える。巻中に、

文通詩体総雑、善於摸擬、筋力於王微、成就於謝朓。

文通の詩体は総雑にして、摸擬を善くし、王微を筋力とし、謝朓を成就す。

とある。江淹の摸倣詩への評価は、後代も概ね肯定的なものが多い。例えば、清・馮班『鈍吟雜錄』「正俗」に、

陸士衡擬古詩、江淹擬古三十首、如搏猛虎、捉生龍、急与之較、力不暇、氣格悉敵。今人擬詩、如牀上安牀、但覺怯處種種不逮耳。然前人擬詩、往往只取其大意、亦不尽如江・陸也。

陸士衡の擬古詩、江淹の擬古三十首、猛虎を搏り、生龍を捉うるが如く、急なること之れと較まい、力めて暇あらず、氣格悉く敵えり。今人の擬詩、牀上に牀を安んずるが如く、但だ怯を覚ゆる處は種種逮ばざるのみ。然れども前人の擬詩、往往にして只だ其の大意を取るのみにして、亦た尽くは江・陸に如かざるなり。(※牀上安牀ベッドの上にベッドを重ねる意で、無意味な言葉を繰り返すこと。)

とある。また、江淹に対する否定的な評価も、「雜体詩」に関するものが殆どである。例えば、清・汪師韓『詩學纂聞』に、

江文通雜擬三十首、自謂無乖商榷。後人每效為之。觀其詞句多有可議。……三十首中、蕪詞累句居其半。

江文通の雜擬三十首、自ら商榷に乖く無しと謂う。後人毎に效いて之れを為る。其の詞句を観れば多く議すべきもの有り。……三十首の中、蕪詞累句は其の半ばに居る。

とある。これらの評価を見てみると、肯定意見であれ、否定意見であれ、「雜体詩」が江淹の代表作と見なされているのが分かる。その上、右の『詩學纂聞』の文章に拠れば、江淹以降の人は、江淹の「雜体詩」に倣って摸倣詩を作っていたことが分かり、後世に与えた影響も大きかったことも知れる。後代、江淹の「雜体詩」を摸倣する人が現れたことは、清・顧嗣立『寒疇詩話』にも触れられている。

己蒼先生嘗謂、世人詩集中如有擬鏡歌・和江淹雜擬及東坡尖叉韻、此人必不知詩。悠悠此世、解我語者畢竟無幾人。又曰、詩有擬不得者、江文通雜体是也。有和不得者、尖叉是也。知此者可与言詩。

己蒼先生（馮舒）嘗て謂う、世人の詩集の中に擬鏡歌・和江淹雜擬及び東坡尖叉韻有るが如し、此の人必ず詩を知らず。悠悠たる此の世、我が語を解する者畢竟幾人も無からん、と。又た曰く、詩に擬し得ざる者有り、江文通の雜体は是れなり。和し得ざる者有り、尖叉は是れなり。此れを知る者与に詩を言うべし、と。

馮班の『鈍吟雜錄』や、顧嗣立の『寒疇詩話』を見ると、江淹の「雜体詩」には、後代の擬古作家は及ばないという見解が共通している。後代の擬古作家が、江淹の詩に及ばない

のは、何故なのか。他の擬古作家との違いに、「雜体詩」を彼の代表作にまで高めた理由があるように思える。他の擬古作家との違いを知る上で、元の陳繹曾『詩譜』「江淹」の條に興味深い論が見える。

善観古作、曲尽心手之妙、其自作乃不能爾。故君子貴自立、不可随流俗也。

善く古作を觀、曲まさに心手の妙を尽くすも、其の自ら作るは乃ち能くせざるのみ。故に君子は自ら立つるを貴びて、流俗に随うべからざるなり。(※心手物事に没頭して、手が心の趨くままに動くようになること。)

これは、江淹の詩を稱賛したものではない。しかし、江淹詩の特徴をよく言い当てているように思える。注目すべきは、江淹は摸倣すべき専攻作品をよくよく觀察していて、摸倣に没頭するが故に、自作の詩が摸倣詩とは反対に不得手であった、と考えられていたことである。

つまり、江淹の「雜体詩」が他人の摸倣詩よりも優れていたと評価される理由は、自身で創作する詩を犠牲にしてまで、古人の詩を摸倣することに心血を注いだこと、摸倣の土台として、「心手相応」じるようになるまでの、徹底的な古人の作品への觀察があつたのだと推測される。

ならば、王粲を摸倣した詩に「懷徳」と題したのは、王粲の作品をよく取材した結果、江淹が王粲に対して与えた評価と言えるかもしれない。王粲の詩の特徴としてよく挙げられるのは、乱世での悲惨な情景や、惨い現状を目の当たりにした沈痛な言葉ばかりである。例えば、『漢詩の事典』(松浦友

久編、大修館書店、一九九九)、「詩人の詩と生涯」(宇野直人執筆)では、「その詩には悲痛なものが多く、社会の動乱と民衆の苦難とを直截に描いている点、七子の中でも際だつている」と述べ、その詩風をよく示している例として、「七哀詩二首」其一の「出門無所見……何能兩相完」の部分を用いている。

しかし、その作品を見てみると、全体に漂うのは、天下をよく治めることができる君子の出現を待望する思いである。永田知之氏が、「七哀詩」其一を引いて、「もとよりその背後には、作者の激しい憤りが存在する。詩の中に登場する母は子を棄て、王粲は長安―それが象徴する漢の文化―を棄てる。前漢の名君文帝が眠る霸陵に登り、都を眺めたのは、彼なりの決別宣言、或いは戦乱への抗議だったのか。『下泉』は『詩經』曹風の、悪政下で名君を待望する詩をいう」(興膳宏編『六朝詩人群像』、大修館書店、二〇〇一)と述べるのは、漢の文化を棄てるといった、いささか革新的な部分もあるが、概ね妥当な評価と言えよう。

ここで、王粲に対する評価も、いくつか見てみよう。

七哀詩、子建云、君行踰十年、孤妾常独棲。怨遊子之未返也。王仲宣云、路有飢婦人、抱子棄草間。嘆時世之喪乱也。……哀之雖同、而意各異。初不解七哀義、或謂、病而哀、義而哀、感而哀、悲而哀、耳目聞見而哀、口嘆而哀、鼻酸而哀、所哀雖一事而七者具也。(宋・范晞文『对牀夜語』卷一)

七哀詩、子建云う、君行きて十年を踰ゆ、孤妾常に独り

棲めり、と。遊子の未だ返らざるを怨むなり。王仲宣云う、路に飢えたる婦人有り、子を抱きて草間に棄つ、と。時世の喪乱を嘆ずるなり。……之れを哀しむこと同じと雖も、意は各おの異なれり。初め七哀の義を解せず、或ひと謂う、病みて哀しみ、義ありて哀しみ、感じて哀しみ、悲しみて哀しみ、耳目聞見して哀しみ、口嘆じて哀しみ、鼻酸いにして哀しむ、哀しむ所は一事と雖も七者具はれり、と。

王粲の「七哀詩」には、「嘆時世之喪乱」という評価が与えられていること、また、「七哀詩」に、「義而哀」という要素があることに注目したい。そして、王粲の作品には、率直に過ぎる真実味があると、次に挙げる元・陳繹曾『詩譜』「王粲・劉楨」に言う。

真実有餘、澄濾不足。思健功円（真実餘り有りて、澄濾足らず。思い健にして功円し）。

きれいな修飾に欠けるが、十分に真実を伝える力があり、その思いは素直で、詩による功績は大きいと述べる。つまり、王粲の「七哀詩」などに見られる描写は真実であり、時世を嘆く思いに嘘偽りはないのである。また、王粲には、平和な長安への思慕があつた。

劉文房詩、已是洞庭人、猶看瀟陵月。孟東野詩、長安日下影、又落江湖中。語意相似、皆寓恋闕之意。然総不若王仲宣云、南登瀟陵岸、回首望長安、涵蓄蘊藉、自然不可及也。（明・楊慎『升菴詩話』卷一三）

劉文房（長卿）の詩にいう、已に是れ洞庭の人なるも、

猶お看る瀟陵の月、と。孟東野（郊）の詩にいう、長安日下の影、又た落つ江湖の中、と。語意相似たり、皆闕を恋うの意を寓せり。然れども総て王仲宣の、南のかた瀟陵の岸に登り、首を回らして長安を望む、と云うに若かず、涵蓄蘊藉、自然にして及ぶべからず。

王粲の長安の復興を思う気持ちには、自然な気持ちの発露であるとされる。また、次のような評価もある。

子建函京之作、仲宣霸岸之篇、子荆零雨之章、正長朔風之句、並直挙胸情、非傍詩史、正以音律調韻、取高前式。（『宋書』卷六七、謝靈運伝）

子建の函京の作、仲宣の霸岸の篇、子荆（孫楚）の零雨の章、正長（王讚）の朔風の句、並びに直ちに胸情を挙ぐるも、詩史に傍うに非ず、正に音律を以て韻を調べ、高前式を取る。

これは、歴史を描写する詩と見なすには足りないが、詩の出来の良さのみならず、率直な思いを述べていると見なされていたことが分かる。次に、清・黄維申の「論詩絶句」其五（郭紹虞等編『万首論詩絶句』第三冊、人民文学出版社、一九九一）を見てみよう。

西京擾乱復何之 西京 擾乱して 復た何くにか之

賦罷登楼更有詩 登楼を賦し罷えて 更に詩有り
千里荆蛮愁日暮 千里の荆蛮 日暮に愁え
凄凉惟有七哀詞 凄凉として 惟だ七哀の詞有るの

これまでの王粲評を見てみると、概ね、故郷を愁え、時世を歎く思いに溢れていて、その特徴として、「七哀詩」が代表として挙げられていた。

ここで再び注目したいのは「時世之喪乱」、「義而哀」、「皆寓恋闕之意。然終不若王仲宣」といった言葉があることである。時世を歎くのは、義理による場所もあり、その義理は何に向けて立てているのかというと、長安である。そして、長安の復興を思慕する気持ちは人一倍強かった。長安の復興を望むというのは、太平をもたらす徳ある君子を待望することでもある。

そして、もう一つ注目したいのは、「論詩絶句」に「登楼」の語があつたことである。詩話類に挙げられるのは「七哀詩」が主であつた。しかし、時世を歎き、長安の復興や、徳ある君子を待望する思いは、彼の作品全体に表れている。

例えば、江淹の詩は、「伊昔值世乱、秣馬辞帝京」と、世の乱れから説き出されるが、王粲の作品も、世の乱れを説く句が、作品の冒頭句、あるいは前半に置かれることが多い。

悠悠世路、乱離多阻（「贈蔡子篤詩」第一一・一二句、『文選』卷二三）

天降喪乱、靡国不夷（「贈士孫文始詩」第一・二句、『文選』卷二三）

西京乱無象、豺虎方遘患（「七哀詩」其一、第一・二句、『文選』卷二三）

遭紛濁而遷逝兮、漫踰紀以迄今（「登楼賦」第一五・一六句、『文選』卷一一）

また、これらの作品には、乱世を嘆くと同時に、治世の君子を待望する語が見られる。

嗟爾君子、如何勿思（「贈蔡子篤詩」第四一・四二句）
瞻仰王室、慨其永嘆。良人在外、誰佐天官（「贈士孫文始詩」第三五・三六句）

悟彼下泉人、喟然傷心肝（「七哀詩」其一、第一九・二〇句）

冀王道之一平兮、仮高衢而聘力（「登楼賦」第三五・三六句）

このように、王粲の作品は才能有る人材を引き立て、世を治める君子を待望する語が見える。そして、君子を待望する語は、江淹の摸倣詩にも、「君子篤惠義、柯葉終不傾。福履既所綏、千載垂令名」と見える。

以上のことから考えてみるに、江淹は王粲の特定の詩を摸倣したのではなく、王粲の作品全体にながれる「懷徳」の思いを、作品を深く観察することに拠って導きだし、それを王粲の最たる特徴として摸倣詩の題目に充てたのだろう。「懷徳」は、王粲自身の特徴を言い当てるだけでなく、江淹が深い考察から導きだし、王粲に下した評価でもあると言えよう。もとより、江淹の時代の版本が残っていないため、「雑体詩」の副題を付けたのが、江淹自身であるとは言いが切れない。しかし、仮に、「雑体詩」の副題を付けたのが江淹でなかったとしても、「懷徳」と王粲を結びつけられるほどの風格のようなものが、江淹の摸倣詩にはあつたと言える。

また、このような、摸倣する対象の風格さえも写し取るほ

どの深い考察力こそが、江淹自身の最大の特徴であったと言えよう。このことを看破した詩評を三つ挙げて、この文章の結尾としたい。

夢還錦筆事荒唐 夢に錦筆を還すの事は荒唐なり

即証江郎擬古章 即ち証せん 江郎 擬古の章

神似豈無佳妙作 神似て 豈に佳妙の作なる無からんや

偏生非郭亦非張 偏えに生じて 郭に非ず 亦た張に非ず

（清・張玉穀「論古詩四十首」其三二、『古詩賞析』）

江淹の詩は摸倣詩が優れており、これこそが江淹の独擅場であって、郭璞や張協に五色の筆や錦を返却して詩才が尽きたというのは、真つ赤な嘘だと述べる。

江南河外先分派 江南 河外 先ず派を分かち

鄴下関西亦罕同 鄴下 関西 亦た同じきこと罕なり

（清・黄維申「論詩絶句」其一五）

雑体詩成三十首 雑体詩成ること 三十首

宏農筆尚在懷中 宏農の筆は尚ほ懷中に在り

（清・黄維申「論詩絶句」其一五）

前半の二句は、「雑体詩」序文にある言葉で（「関西・鄴下既已罕同、河外・江南頗為異法」）、江淹の詩学史に対する見識が高かったこと、つまり「善観古作」であったことを称えていよう。そして、ここでも、「雑体詩」を造ることが出来たのだから、郭璞に筆を返していなかったのだと述べる。

歌成白紵座生春 白紵を歌い成して 座 春を生ず

穠艶無如休上人 穠艶なること 休上人に如くもの無し

才似醴陵工擬古 才かに醴陵の擬古に工みにして

碧雲日暮善傳神 碧雲日暮 善く神を伝ふるに似たるのみ

（清・許奉恩「蘭苕館論詩」其三三、『万首論詩絶句』第三冊）

これは、当時、湯惠休に及ぶものはいなかったが、江淹だけがよく彼の詩思（神）を再現できたことを述べる。これは、江淹の観察眼が優れていたことを示そう。なお、「碧雲日暮」は、江淹「雑体詩」の「休上人」中の詩句（日暮碧雲合、佳人殊未來）である。

（筑波大学大学院人文社会科学科博士課程）

（清・許奉恩「蘭苕館論詩」其三三、『万首論詩絶句』第三冊）